



カナダで学んだ3つのこと

東京都 フロンティア豊島 野村絢子

ケベック州は人口750万人、80カ国からの移民を受け入れ言語は仏語である。モントリオールはケベック州のセントローレンス川の中洲部分にあり、100の鐘楼がある街といわれるほど教会が多い。80%がカソリックである。医療福祉等は州単位となっている。

モントリオールにあるCLSC〈地域住民サービスセンター〉は、地域住民が安心してより暮らし易くすることを目的とした公的施設であり、モントリオールのダウンタウン地域内には2004年以降、このCLSCが3カ所ある。地域の保健所ともいうべき役割を担っている。ショッピングセンターなどに併設されており、市民にとっては病院より身近な存在である。サービス内容は基本的な医療サービス、出産や育児に関わること、在宅介護サービス、メンタルヘルス対応等、乳児から高齢者までの地域住民の福祉窓口である。

CLSCが運営する老人ホームは7カ所であるが、視察の老人ホームは、入居者数185名、平均年齢は79歳、男性33%、女性67%である。入居者と職員は1:1以上。老齢は病気ではなく、人生一つの段階であると捉え、老齢で自立できなくなった方が新たに生きる喜びを味わっていただくことを使命としている。職員に哲学をわかってもらうために、ミッション（高齢者の権利と自由憲章）を示している。長く働いている職員がこの精神を体現し、新しい職員に伝えていくことが理想であるとの意見が印象的であった。第1に、良い仕事のためにはミッションが必要であり、職員に浸透しにくいからこそ、毎日確認する必要があることを学んだ。「自分で守れない自由ほどもろいものはない。それを守って差し上げるのが私たちの仕事である」という言葉に感銘を受けた。入居者のために、外の町を施設の中に持ってくるというユニークな発想で教会、託児所、美容院、本屋、図書館、調理室等がそろっていた。看護



施設内美容院

師の詰め所やユニホームもなく、病気を考えないで普通に生活する。各自のプランに添ってもっと楽しく暮らせるよう、本人の意欲を引き出すように努めていた。

第2には、何よりも本人の意思を尊重する精神風土に感心した。職員はプロとして事故の予測の対応をするが、事故のリスクを恐れるよりは、本人の意思を尊重する。その結果事故になっても自己責任である、との考え方には堅固な個人主義が感じられ、興味深かった。日本にはそのまま持って来られない難しさも感じた。第3にはボランティアの多さである。職員にすると何人分であると数値化しているところも説得力があった。ごく自然に日常的にボランティアをし、ボランティアを受けいれていると思った。

視察先の公立老人ホームの入居者負担は、民間に比べて安いとはいえ、月額約15万円である（実費は月55万円。入居者の収入によって5万円、0円もある）。カナダは消費税14%、所得税40%（年収400万の場合）である。医療費は薬の一部を除き無料と聞いたが、日本の介護保険制度の方が我々にとっては、よりマッチしていることもわかった研修であった。